フクシマ詩編　より

小林守城

初日にも茜の毒は見えぬなり　ただ掌を合せ何を祈らん
柵（しがらみ）を抱いて一つの愛とせん　人それぞれの額を上げて

フクシマ　1

うそぶいてもすぐわれてしまう
共生のまちかど

ここもすでに汚染されている
ふるさとのマロニエ

詩のないしずかさ
悲しみを過ぎていま憤りだけの

虚しさをおのれ（己）
文明の釜に焚いて

下を向いて行け
どこまでもフクシマ

フクシマ　2

ボロボロになった絆と言葉
愚かさを隠して焚き続ける
核の文明の柵
身震いする大地の朝明け
言葉は戻ってくるだろうか
まだ間に合うだろうか

血のにじむ霜柱を紡ぎだし
愚直の窯に残業してでも

結びなおしていかねばならぬ
いのちへの這い出し

もういいのだ私たちは
これは稲わらの表札を掲げ
麦色に婚礼する未来への
孫たちへの責務だから

フクシマ　3

雨も雪も
まことの言葉を語り続ける

放射能をまとった
真言の闇からいずこへ

子どもが眠らずに
耳を傾けるような
道案内ができようか

古希近い詩人に
樅の梢の汚れた
梵字のさびしさ

フクシマ　4

わすれずに叢生(そうせい)した水仙

手足はまだ縮(ちぢ)かんでいても
枯れ枝に鳥が来て見ている
下草の芽立ちを見ている
フクシマの空から渡ってきた
鳥たちよ　その高みから
蠢(うごめ)いているわたしたちが見えるか

嘯(うそぶ)いてもすぐに割れてしまう
一人ひとりの街角や野末で
なんどでも循環・共生の
お札を売ろう
三月の霙　痛く浸み込み

やがてふる里はさつきの季節
よみがえれ　オオサカズキ
名もない原野の母のような赤い花
いまや汚れたもんぺを穿いて

神さびて情けましたる春の雌猫(ねこ)
今年は一段とくるおしい

フクシマ　5

柵のない愛など信じるに足りぬ
いのちが柵として
立ち現われる　３・１１
もう無垢にはなりえない
それでも希望でありたい
血のにじむ夜明けの霜柱よ

あー容易(たやすく)く言葉を失ってはならぬ
生きるものの悲しみあれば
苦しみを分かち合える　言葉よ
いまこそ人々の沈黙の呻きに
対生する言葉を繋(つな)げよ
意識の底深くに凝る闇となる前に

詩人よ　いま生きものの先端で語れ
累々とした屍　有縁の生の
行方も知れぬ春暁の夢のなかで

フクシマ　6

雪は天空の　花であった
その雪洞に　閉じられて　底ふかく
懐かしい人たちが　やってきそうな　夜へ
交差する軌道なんて　滅多なことではない
青白い火花が　さらさらと　久しく眠りを誘う
このようにして　雪婆（ゆきばんご）　消えてもいい

頂上の向日葵が　いくつも燃えさかり
ぎらぎらの　水平線に　目覚めると
生ぐさい　都市の暗渠は　群れて流れだし
人はみな劇場へ　出ていってしまい
くらくらと　立ち竦む　ばかりなのだが
このようにして　白日を　閉じてもいい

あー　かざはなだ
理科の本で　みたもん
風の小さな　白い渦のあそび　晩秋の校庭で
雹や霰より　きらきらと　やさしくて
子どもたちは　それでもなぜか　急いで家に帰る
舞うてくる微塵を　風花と呼んできた
野末の　コスモスが招く　凍った火花を
風の花であると　する限り　言葉よ
わたしたちに　未来はあるのだ